

# ジェイ・ルービン訳「羅生門」を用いた授業実践

吉野泰平(国語科)

## 1 「羅生門」の英訳

芥川龍之介「羅生門」の語り手が「自己顕示的」であることは石原千秋の指摘<sup>①</sup>などによりすでに広く知られている。ただ、それをナラトロジーを知らない人へ伝えるためにどのような工夫ができるのか。本稿では、ジェイ・ルービンによる英訳を用いることで「羅生門」における自己顕示的な語り手をさらに顕在化し、語り手への注目を促す試みについて検討していきたい。

ジェイ・ルービンはアメリカにおける村上春樹の主要な翻訳者としても知られ、村上春樹の翻訳の後に取り組んだのが芥川の翻訳である。ルービン自身は「芥川は、村上春樹の作品ばかり十年くらい翻訳していた後にとりかかったものですから、本当に苦労しました。たとえば、『尾形斎覚え書』という短篇は、変わった作品で、皆さんはたぶんご存じないでしょうけれども、候文で書いてあります。それを英訳するのにとにかく骨を折りました」<sup>②</sup>と述べており、翻訳に際しては意味だけでなくスタイルにも注目している様子をうかがうことができる。英訳の周辺事情については関口安義が詳しく解説しており、少し長くなるが引用したい。

英語圏の大手出版社ペンギン社のペンギン・クラシックス・シリーズの一冊に、『「羅生門」ほか17編』(*Rashomon and Seventeen Other Stories*)という新訳によるアンソロジーが入り、二〇〇六(平成一八)年春、刊行された。ペンギン古典叢書に入る最初のアジア作家が芥川龍之介であった

ことは、芥川再評価・再発見の象徴的出来事と言えよう。訳者はハーバード大学の俊英ジェイ・ルービンで、訳書巻頭には、村上春樹のかかなり長い序文がついている。村上のこの序文は、芥川独特の虚構を高く評価し、その文体と文学センスに讃辞を惜しまないものとなった。(中略)ルービンは、芥川作品を新たに英訳すること、それは「大いなる再発見の旅」であったという。彼は大学院生のころに小島巖の英訳を通して芥川作品にふれており、現在は村上春樹の英訳者として、また『村上春樹と言葉の音楽』という著書を持つ研究者としても著名である。そうした彼にペンギンの編集者の読み巧者サイモン・ウィンダーが、「芥川を新しく訳出してそれに村上の序文をつけるという案」を提案してきたのだという。<sup>63</sup>

ここで触れられている旧訳についてはルービンも「実はペンギン社は *Rashomon and Seventeen Other Stories* 『「羅生門」その他の短篇』というタイトルを望んでいたが、私の方は、小島訳で一九五二年に刊行された訳書とは違う題名にしたかった」<sup>64</sup>と述べており、この1952年に出版された翻訳が英語圏における「羅生門」受容に大きな役割を果たしたことは確かであろう。「羅生門」の旧訳と原文の比較研究は1989年に発表された平岡敏夫の論があり、旧訳をめぐるいくつかの問題点が指摘されている<sup>65</sup>。旧訳に関してここで詳細には触れないが問題を抱えた翻訳が半世紀以上用いられてきたという点を考慮しても、ルービンによる新訳の意義は大きいといえるだろう。

しかし、本稿で指摘したいのは英語圏における新訳の意義ではなく、この新訳との比較が日本語の原文を理解する際にも有益であるという点である。実は、ルービン訳の「羅生門」にも原文とのズレが生じているように見える箇所が存在する。ただ、それは決して「間違い」ではなく、むしろ語彙のレベルだけでなく語りのスタイルまでを忠実に翻訳しようとした結果なのではないか。ルービンは、芥川の小説における「語り」に注目して以下のように述べている。

芥川は舞台設定と小説構成の巨匠といえる。そして何よりも、ヴォイスの達人である。たとえば平安時代末期を舞台とする物語の語り手は多様きわまりない。十二世紀の社会の架空の一員だったり（「地獄変」および「竜」）、「日記」に言及する当世の研究者もどきの観察者だったり（「羅生門」）、ひとつの出来事をめぐる目撃者たちのいくつかの証言をなぜかまとめあげることのできる、実体のない編集者だったり（「藪の中」）、その存在はまったくといっていいほど認識されず、きわめて客観的であるように見える書き手（「鼻」）だったりする。<sup>6)</sup>

ここからはルービンも芥川の特徴として巧みな「ヴォイス」の使い分けを挙げていることがわかる。小説における「ヴォイス」の問題は物語内容と比較して授業では扱いつらい。その一因として、語りの形式が一目でわかるものではないことが挙げられる。そうした意味で「自己顕示的」な語りをもつ「羅生門」は小説における語りの問題を意識する好機であり、ルービンの英訳がその問題への入り口となるだろう。「羅生門」原文とルービンの翻訳の差異を見出す作業が「羅生門」そのものの理解へとつながる可能性については次節以降で検討していきたい。また、さらなる課題として、世界文学としての「羅生門」<sup>7)</sup>や「国語」における翻訳といった問題<sup>8)</sup>との関連も考えられるが、ひとまず本稿では語り手への注目を促すことに主眼をおくこととする。

## 2 人称代名詞による語り手の顕在化

「羅生門」原文とルービンによる英訳を比較してまず気づくのは、日本語の原文では明記されていない人称代名詞が英訳では明記されていることである。以下にその例を示す。

## 原文

旧記によると、仏像や仏具を打碎いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の料に売っていたと云う事である。

## 英訳

Old records tell us that people would smash Buddhist statues and other devotional gear, (….) and sell them as firewood.

「旧記によると～云う事である」という箇所が、原文には存在しない“us”という人称代名詞を加えながら訳出されていることがわかるだろう。このように訳文と原文を比較することによって、では、“us”とは誰と誰かという問いが生まれる。

この“us”がこの物語の「読み手」を含むことは容易に看取されるだろう。ただ、それだけならば人称代名詞は“you”になるはずであり、それは語られる対象としての「読み手」が複数人であった場合も同様である。すなわち、ここでは日本語の原典では明記されていなかった語る人物としての「語り手」の存在もまた、文中に明記されているのである。

石原千秋は上記の引用箇所を「自己顕示的」な語り手が表出している部分として挙げ、次のように述べている。「いま引用した一節の語り手が、作中人物である下人よりも多く知っていることは明白である。だが、問題は、知っているというその身振りが、作中人物に対するものを超えているという点にある。傍線部のように「なりさうなものである」と謎めいた問いを投げかけ、「何故かと云ふと」と理由を説明し、「旧記によると……と云ふ事である」と「引用」してみせる身振りは、いずれも読者に対するものだと言ってよい。しかも、この語り手は「旧記によると」とか「と書いた」などと語り、読者の現在へ向けて働きかけていることもはっきりしているのである」<sup>9)</sup>。

“us”という人称代名詞は、ここで石原が述べる読者へ向かう語り手の意識をより看取りやすくする効果ももっている。英訳においては“Old records”を操作する主体としての語り手だけでなく読み手の存在も文中に明確にえがかれており、語り手の「身振り」が顕在化しているのである。それをさらに確認するため、他の原文と英訳の差異を見てみたい。

#### 原文

作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと云う当てはない。

#### 英訳

We noted earlier that the servant was “waiting for the rain to end” but in fact the man had no idea what he was going to do once that happened.

この部分は原文においても「作者」を自称する語り手が完全に顔を出している箇所である。ただ、語り手を顕在化するだけであれば「作者」という単語を直訳してもよいはずで、読み手を含む“we”という人称代名詞を用いることによって、語り手が読み手を意識しながら語っていることをも表現することができるのである。

ここまで論じてきたように、ルービンの英訳には語彙のレベルで原文に存在しない要素が現れているように見えるが、それが「誤訳」でないことは明らかである。むしろ、物語内容だけでなく語り手の姿勢までもが翻訳されているといえるだろう。この訳文では読み手を意識しながら語る「自己顕示的」な語り手という語り手のスタイルも翻訳することに成功しており、それは翻って原文の理解にも寄与するものなのである。

### 3 イタリック体による内的焦点化の明示

前節では原文でも語り手が顕在化している箇所について検討してきたが、次に比較的語り手が見えにくい箇所についても原文と訳文の差異を検討していきたい（便宜上、訳文中のイタリック体の箇所は斜体で示す）。

原文

この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「盗人になるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

英訳

he could not find the courage for the obvious conclusion of that  
“if” : *All I can do is become a thief.*

まず、ここでは人称代名詞として“he”と“I”の2種類が用いられているが、“could not find the courage”の主語も、“*become a thief.*”の主語も両方が下人であることは明白で、下人という同一人物をなぜ2種類の人称代名詞で訳し分ける必要があったのかという疑問が生じる。

さらに、上記の問題とも関連するが、「すれば」と「盗人になるよりほかに仕方がない」は原文において両方ともカギカッコで囲まれているが、英訳では処理が異なっている。「すれば」はダブルクォーテーション、「盗人になるよりほかに仕方がない」はイタリック体という処理のちがいが生じているのである。

両者のちがいは、訳文において語り手のポジション、すなわち内的焦点化と外的焦点化の境界が表現されていることに起因するものと考えられる。

ルービンは「盗人になるよりほかに仕方がない」と考えている主体を“I”と訳出しており、これは下人の心内の描写として把握されていることがわかる。

先述の通り、語り手は「旧記」を参照していることから下人自身ではなく、またこれは下人が声に出した言葉でもないため、語り手が心内を知るには下人の心の内に潜り込む（＝内的焦点化）しかない。

つまり、下人が“he”と書かれている場合、語り手は下人の外側から客観的な状況を描写している（外的焦点化）が、下人が“I”と書かれている場合、語り手は下人に潜り込み、下人の内側から描写している（内的焦点化）。このように、語り手のポジションのちがいが書体のちがいで表され、イタリック体は内的焦点化の指標として用いられていることがわかる。先の「なぜ同じ人物に異なる人称代名詞を使わなければならなかったのか」という問いへの回答を端的に言うならば、語り手のポジショニングが異なるからということになる。

しかし、翻訳の際にこの部分を全て語り手の判断であることにし、外的焦点化の語りのみで訳出することも不可能ではなかった。なぜ、わざわざ書体の変更という工夫を施してまで語り手のポジションの移動を明確に示したのかを考えると、やはりそれは「羅生門」が「自己顕示的」な語り手に特徴づけられる小説だからであろう。訳文では語り手の動きが書体のちがいによって明らかにされることで、語り手があぶりだされ、顕在化しているのである。

同種の表記が現れている箇所をもうひとつ見てみたい。

#### 原文

雨風の患のない、人目にかかる惧のない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである。

#### 英訳

*If only there were some place out of the wind and rain, with no fear of prying eyes, where I could have an untroubled sleep, I would stay there until dawn, he thought.*

ここでも、イタリック体の箇所では語り手は下人に内的焦点化しており、下人は“*I*”という人称代名詞で表されているが、最後の“*he thought*”において語り手は下人から離れて外的焦点化の語りに移行しているといえる。英訳では語り手のポジションの移動が書体の相違という明確な指標で示されることによって、語り手の存在が原文にも増して顕在化しているのである。また、老婆についてイタリック体で記述されている箇所はなく、外的焦点化の語りのみで語られている。こうした語りの技法によって老婆の得体の知れない様子がさらに強調されているとも考えられる。

以上のように、人称代名詞とイタリック体という英訳だけに現われる指標は非常に分かりやすく、高校1年生でも原文との差異に気づくことができる。原文と翻訳との差異を起点に、そうした現象がなぜ起きているのかを追究していくことによって、小説における語りの考察へとたどりつくことができるのである。

#### 注

- (1) 石原千秋「語り手と情報—芥川龍之介『羅生門』『テキストはまちがわない』(筑摩書房 2004.3)
- (2) 藤井省三、コリーヌ・アトラン、金春美、ドミトリー・コヴァレーニン、頼明珠、ジェイ・ルービン「翻訳者が語る、村上春樹の魅力とそれぞれの読まれ方」柴田元幸、沼野充義、藤井省三、四方田犬彦編『世界は村上春樹をどう読むか』(文芸春秋 2009.6)
- (3) 関口安義『世界文学としての芥川龍之介』(新日本出版社 2007.6)
- (4) ジェイ・ルービン「芥川龍之介と世界文学」『芥川龍之介短篇集』(畔柳和代訳 新潮社 2007.6)
- (5) 平岡敏夫「『羅生門』—英訳講義にみる若干の問題—」『日本文化研究』(筑波大学大学院) 1989.12



- (6) ジェイ・ルービン「芥川龍之介と世界文学」(前掲注4)
- (7) 「羅生門」については英訳のほかにも、魯迅による翻訳で知られる中国語訳なども検討されている。詳細は、単海林「直訳手法から見る魯迅の異化翻訳 『羅生門』の中国語訳の比較を通して」(『東アジア日本語教育・日本文化研究』2015.3)などを参照。
- (8) 「国語」という教科において翻訳が果たす役割の可能性については、陣野英則「文学教育にかかわる私的経験から—翻訳された文学の可能性—」(『日本文学』2020.1)が示唆的な議論を展開している。
- (9) 石原千秋「語り手と情報—芥川龍之介『羅生門』」(前掲注1)

※芥川龍之介「羅生門」の引用は『高等学校国語総合 現代文編』(三省堂2018)に拠り、英訳版「羅生門」の引用は Ryunosuke Akutagawa (translated by Jay Rubin), *Rashomon and Seventeen Other Stories*, London, Penguin Books, 2006に拠る。

本稿は2018年度、高校1年生を対象に行った国語総合の授業内容に基づくものである。

授業運営にあたり適切なお意見を賜った小泉尚子氏に感謝を申し上げます。

## 【「羅生門」ワークシート】

※なお、授業内では「羅生門」の英訳に下線①～④を付したのも配布している。

組 番 ( )

● 「羅生門」の語りの構造+英訳RASHOMONを読んでみる

問、芥川龍之介「羅生門」(教科書)と、ジェイ・ルービン訳RASHOMONを参照しながら以下の問いに答えなさい。

①Old records tell us that people would smash Buddhist statues and other devotional gear, (….) and sell them as firewood.

1. 下線部①に対応する箇所の「羅生門」原文を書き出さなさい。

( )

2. 下線部①を直訳しなさい。

( )

3. 下線部①中の「us」とは誰と誰のことか。考えて書きなさい。

( )

②We noted earlier that the servant was “waiting for the rain to end” but in fact the man had no idea what he was going to do once that happened.

4. 下線部②に対応する箇所の「羅生門」原文を書き出さなさい。

( )

5. 下線部②を直訳しなさい。

( )

6. 下線部②中の「We」とは誰と誰のことか。考えて書きなさい。

( )

③he could not find the courage for the obvious conclusion of that  
“if” : *All I can do is become a thief.*

7. 下線部③に対応する箇所の「羅生門」原文を書き出さない。

( )

8. 下線部③を直訳しなさい。

( )

9. 下線部③中の「he」、「I」とは誰のことか書きなさい。

「he」 =                      「I」 =                      )

10. 下線部③中の一部がイタリック体（斜め）になっているのはなぜか。考察しなさい。

( )

④*If only there were some place out of the wind and rain, with no fear of prying eyes, where I could have an untroubled sleep, I would stay there until dawn, he thought.*

11. 下線部④に対応する箇所の「羅生門」原文を書き出さない。

( )

12. 下線部④を直訳しなさい。

( )

13. 下線部④中の「I」、「he」とは誰のことか書きなさい。

「I」 =                      「he」 =                      )

14. 下線部④中の一部がイタリック体（斜め）になっているのはなぜか。考察しなさい。

( )